



Title	ヴァージニア・ウルフ : 小説の秘密
Author(s)	坂本, 公延
Citation	大阪大学, 1979, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32427
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	坂本公延
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 4763 号
学位授与の日付	昭和 54 年 12 月 10 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	ヴァージニア・ウルフ ——小説の秘密——
論文審査委員	(主査) 教授 山川 鴻三 (副査) 教授 毛利 可信 助教授 藤井 治彦

論文内容の要旨

本論文は、人生、文学、現代小説史という三つの座標からのウルフ像の考察（序論）から、新しい文学への自覚を示す初期の二編の小説と、二つの「現代小説論」の研究（第一章——第二章）を経て、多様な展開を示す七編の長編小説の分析（第三章——第九章）に至る、十章より構成されている。以下順を追って各章の要旨を述べる。

序論 ヴァージニア・ウルフの座標。まず「人生の座標」でのウルフ像に光をあて、著名な文芸批評家レズリー・ステイーヴンを父として生まれた彼女が、当時の著名な文学者たちに囲まれながら小説家として円熟していったこと、しかし同時に両親の家系には何人かの精神病患者があり彼女自身「精神の癌」というべき彼女の精神病と生涯戦いつづけたことを述べて、彼女の生涯における明暗を描く。ついで「文学の座標」でのウルフ像に移り、ある大学の英文科で学生の三分の一がウルフ研究者だったというアメリカにおいてばかりでなく、英国、日本においても、研究者たちがややもすればウルフが小説家であることを忘れていた点を鋭く指摘する。最後に現代小説史という座標でのウルフの位置を探り、ウルフの初期の短編小説と七編の長編小説が、ヘンリー・ジェイムズの『黄金盃』、フランスのヌヴォー・ロマン、ジョイスの『ユリシーズ』に代表される現代小説というものの宿命を、ただ一人でたどったのだと結論する。

第一章 初期の作品——新しい文学への胎動。伝統的手法で書かれた長編小説『船出』と『夜と昼』を中心に上げ、前者はハーディの詩を、後者はドストエフスキーの小説を、それぞれ創作の「海図」として用い、それらが後に『オーランドウ』や『波』で完成される小説の技法を予示する点を明らかにする。併せて、これらとほぼ同時期に書かれた短編小説「壁のしみ」と「キュー植物園」

を扱い、前者は『ダロウェイ夫人』へ至る道を開き、後者は『ジェイコブの部屋』につながることを論証する。

第二章 二つの「現代小説論」。ウルフはこれらの小説を書いているころ、『タイムズ文芸附録』に掲載した「現代小説論」(‘Modern Novels’)で、内的世界の発見とその表現の必要性、手法などについて力強く述べているが、この論文は後に‘Modern Fiction’として『普通読者』(第一集)に収録された。従来諸家によってほとんど看過されてきた、この二つの「現代小説論」の相違を綿密に考証し、ウルフが後者の論文において、作家としての一層充実した実践を踏まえて、新しい視野を獲得したあと、立場そのものの修正を含めたかなりの改訂を試みたことを、明快に実証する。

第三章 『ジェイコブの部屋』——ヌヴォー・ロマン的発想。この小説は、登場人物たちがただ断片的な会話を通して語るのみで、彼らの間には何の関係もなく、彼らは波やカモメと等価な物として見られる表層の文学であるとし、この点で、第一次大戦後に登場したこの小説が、発生の事情をやや異にしながらも、第二次大戦後に登場したフランスのヌヴォー・ロマンの成功作を先取りしている事実を強調する。

第四章 『ダロウェイ夫人』——心理の海への下降。従来ほとんど無視されてきた短編小説「ボンド街のダロウェイ夫人」に十分な照明をあてて、これを『ダロウェイ夫人』の発想の原点として重視し、この長編小説が『ジェイコブの部屋』の表層の文学とは逆に、ジョイスの『ユリシーズ』流の、心理の海へと下降していく深層の小説で、人物たちの生きざまを内面から描写し、ついに生と死の形而上学を確立する多様な過程を描く小説であるとし、その多様な確立の過程を、主題と手法と構成を通じて綿密的確にたどる。

第五章 『燈台へ』——時間の喪失と回復。この小説は三部より成る。まず第一部「窓」について、ラムジー氏とラムジー夫人の、それぞれ疎外的現実的視点と抱擁的空想的視点があることを示し、第三部に登場しないラムジー夫人の視点が、第三部まで生きのびるリリーの視点に取って代わられる過程を克明にたどる。ついで第二部「時は逝く」の存在理由について、諸家の意見を修正して、次のような結論を導く。すなわち、第一部の多彩な意識のモザイクが第二部の十年の歳月を通過することで、どの程度、時間の侵蝕に耐えて再生することができるかを示すこと、これがその存在理由であると。最後に第三部「燈台」については、陸にいるリリーのラムジー夫人的視点と舟で燈台に向かうラムジー氏の視点とが交互に描かれて、二つの視点の並置が巧妙に行なわれることを指摘したのち、息子のジェイムズが燈台の現実の無残な姿を知らされると同時に、遠く美しく白く輝く燈台の姿をも容認して、ラムジー氏の視点とラムジー夫人的視点とを合わせた複眼的視点を手に入れることを説く。

第六章 『オーランドウ』——伝記的問題と現代の神話。エリザベス一世治下の少年として登場し、十七世紀に女に変身し、長編『樫の木』を書きながら二十世紀まで生きのびる詩人オーランドウの伝記であり、ユングの「集合的無意識」に訴える現代の神話でもあるこの小説が、その「青写真」として、女流詩人ヴィクトリア・サックヴィル＝ウェストのクロニクル『ノールとサックヴィル家』を用いているという、従来閑却されてきた事実に着目し、両者の関係を精密に跡づけ、丹念に考証する。併せて、もう一編の伝記的小説『フラッシュ』が、エリザベス・バレット・ブラウニングの詩を創作

の「青写真」として、やはり伝記と小説を超えた新しいジャンルになっている点を強調する。

第七章 『波』——シェイクスピアのソネットと虚構と現代。この小説のタイトルがシェイクスピアの第六十番のソネットからの借用であるという仮説に立って、ト書と独白から成るこの小説の九つの部分をこのソネットと比較しながら、詳細に考察し、最後に諸家によって謎と見なされてきた最後の一行「波は岩に砕けた」が、実は第十のト書にあたるもので、ただここには独白の部分が空白なだけだと、この謎に見事な解決を与える。

第八章 『歲月』——ウルフの転向。最初『パージター家の人々』と題されるノヴェル・エッセイとして構想されたこの小説は、「ヴィジョン」から「事実」へ帰った小説であるとし、1880年代から1930年代に至る英国社会の変動期を背景に、パージター家三代にわたって展開される小説のストーリーを、食事の場面を中心にして克明に跡づける。

第九章 『幕間』——時間の海での浮遊。『燈台へ』の第一部が第一次大戦直前の一日に限定されたように、第二次大戦直前の1939年6月の或る一日とその前夜に限定されたこの小説は、この現在を基点として、個人的な過去、英国史的な過去、或いは人類史的な過去を、登場人物たちのヴィジョンとして、或いはパジェントに仕組まれた社会的な事実として、読者の前に現前させるものであるとし、特に頻出する「断片」のイメージに注目して、そこに現代的分裂意識のあらわれを見、この小説を書き残して狂気の発作で自ら命を絶ったウルフの描写で、巧妙に論を結ぶ。

論文の審査結果の要旨

以上見てきたように、筆者は、諸家の看過した作品や問題に新しい照明を与え、あるいは諸家の意見を修正するなど、本論文には筆者の創意が至るところに散見される。しかし、本論文の最も著しい特色は、本論文が筆者の実作者としての体験をもとにしてウルフの小説の秘密を明かそうとする試みである点である。そのために筆者は、ウルフが小説を書くために用いた「海図」を発見しようとつとめるのであるが、その勘の鋭さはほとんど驚嘆に値するもので、『波』におけるシェイクスピアのソネット六十番や『オーランドウ』におけるヴィクトリア・サックヴィル＝ウェストのクロニクルは、その最も成功した例である。中でも、筆者がヴィクトリアのクロニクルという資料を得て、『オーランドウ』の小説の秘密を解明する手さばきは、まことに水際だっている。本論文の方法上の特色は、その細心精緻さにある。「現代小説論」の二つの版の比較校合や、オーランドウの変身の年（1668年）の確立など、ほとんど科学者の手になるかと思われるほどである。文章は豊富な語彙と巧みな比喻から成る名文で、しかも理路整然として人を首肯させる説得力をもっている。

しかし本論文にも疑点がないわけではない。それは主として論文構成に関することで、序論に置かれている、現代小説史という座標でのウルフの位置の考察は、むしろエピローグに置かれるべきものであること、二つの「現代小説論」（第二章）は前後のウルフの作品研究とは異質のもので、むしろアペンディックスとして最後に廻した方がよいように思われること、またほとんど同じ詳細さで三度も

繰り返し述べられている二つの短編小説「壁のしみ」と「キュー植物園」の解説は、一度だけでよく、あとはそれに言及するような形にすることが望ましいと思われること、などである。また本論文は書物として公刊された関係で、ウルフからの引用が全部邦訳になっているが、少なくとも、描出話法のようなニュアンスを訳出しにくい文章は原文のまま引用してほしかったように思う。しかしながら、これらはただ論文作成の技術の問題にすぎず、本論文の独創性をいささかも損なうものではない。

以上の観点から本論文は文学博士の学位を授与するに十分適格であることを認定する次第である。